

モンゴル国の国内人口移動の概要と ウランバートルの人口増加の背景

地球研
生態系ネットワークの崩壊と再生 プロジェクト
2009年5月25日
前川愛

1. 制度的な特徴

社会主義時代の人口再分布政策

目的：A.計画経済上

A-1.工業都市への労働力の配分のため

この場合の工業都市とは

- 1)ウランバートル（首都・製造業）
- 2)ダルハン市（石炭都市）
- 3)エルデネト市（モリブデン都市）

A-2.集団農場への労働力配分のため

この場合の目的地は

トップ・アイマグ（県）

セレンゲ・アイマグ

ボルガン・アイマグ（やや少なめ）

<資料p.18⑭>

→ 定住人口は社会主義時代を通じて増加

目的の続き

B.行政上

国家による登録の管理を徹底させるため

都市サイズのコントロール <refモスクワ>

移動の手続き：就学先、就業先がない限り、
移動先での住民登録は不可能だった。
それらの証明書が行政上発行された
場合のみ、公式に移動できた。
就学前の子ども、引退後の老人を除き、
すべての社会サービスから阻害される
ために、徹底して移動は管理されていた、
と考えられる。

したがって、自然発生的な意味での
国内人口移動として、移動を扱うことは
できない。1990年まで。

しかし！移動に個人の希望や意志が
まったく反映されていなかったとい
う意味ではないことに注意。

ポスト社会主義時代

移動の自由化時代

1992年の新憲法で移動の自由が謳われる

↓

しかし、制度としての手続きの煩雑さと
住民登録に必要な経済的な負担は残った。

例：

2003年まで、値段は変動がありながらも、住民登録料を支払わなければならなかった。

2001年当時、25ドル程度。
当時のモンゴル人の収入レベルからすると、
月収の半分、ヒツジ1頭分くらい

その結果、公的な登録を行わない
都市部への移動が激増

<資料p.33、p.35の58>

2003年の制度上の転換

都市部の土地の私有化を円滑に行うために
政府は、住民登録料を徴収しないことを決定
(資料：P.9)

→その結果、ウランバートルへの流入人口が
統計上、激増する。

これは登録上の問題のため、2003年に
ウランバートルへの人口移動が急増したと
みなしてはならない。

2. 1990年以後の移動の変遷

1. 1990年直後の地方へのリストラ・失業移動
2. 1996年ごろからの継続的な都市への移動の増加
3. 2000年前後のゾド（干害・冷害）の影響による
都市部への移動の増加
4. 現在まで、都市部への家畜のない人たちの
流入は続いている

1. 1990年直後の地方へのリストラ・失業移動

社会主義時代

民間セクターはほとんど存在せず、
すべての人は、遊牧民も含めて、公務員で

「月給取り」だった。

1990年の民主化で、公共セクターは大幅に縮小され
た。また、牧畜協同組合に所属し、月給を現金
で受け取っていたサラリーマン牧民（全員）は
突然、「自由になった」といわれて、強制的に全
員フリーランス遊牧民になった。

1990年前後、まず、公共セクターで働いていた公
務員（定住人口全員）は、失職したので、牧畜協
同組合もほとんど崩壊し、新規参入も可能になっ
た遊牧民に転職した。

→この結果、1990年前後は、地方人口が一時的に
増えるという現象が起こっている。

移動量は89年の5倍になった。

流れとしては 「都市部 → 地方」 移動
(資料p.13①、17⑫参照)

2. 1996年ごろからの継続的な都市への移動の増加
サラリーマン牧民から、自営業者遊牧民になった
人たちは、自律・自立的に遊牧経営を市場経済化で
営むことになる。

→市場からの距離、道路からの距離、
畜産物の価格にまず適応することが求められる。
伝統的な遊牧に回帰したのかもしれないが、
月々の現金収入が途絶えたことから、
まず自由主義市場経済に適応することのほうが
優先する社会状況へ（→カシミアの原因）<p. 15⑤>

→才覚と条件（市場からの距離など）による個人と
モンゴル国内での空間的な差が
大きな意味を持つようになる

- しばらくして新時代のフリーランス遊牧民で食っていけない人も続出
- 地方から都市への家畜のない移動としてのブッシュ要因へ

3. 2000年前後のゾド（干害・冷害）の影響による都市部への移動の増加

「社会主義時代末の年代に牧畜業分野が私有化され、都市・定住化地域の住民が地方を目指して移動した。これらの人々の一部は仕事・学業を捨てて家畜を飼い、その利益を得るという形で、利益・収入を増加させる可能性を探る人々であった。これらの多くは家畜を育てる能力をそれほどよく身につけてはいなかった。自然の厳しい災害、ガン・ゾドを乗り越えることは、彼らにとって非常に困難な試練となったことから、彼らの多くは牧畜業を捨て、地方から都市・定住化地域へと戻ってくるに至った。」
 <資料：p.13、p.14③など>

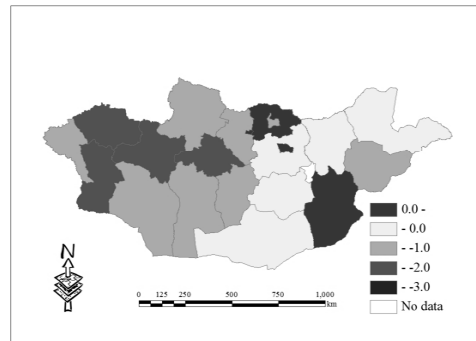
→1990年直後に遊牧民になった人たちが再び都市へ自然災害からの緊急避難としての都市への移動

4. 現在まで、都市部へ家畜のない人たちの流入は継続中

都市へ家畜なしに来る人たちは

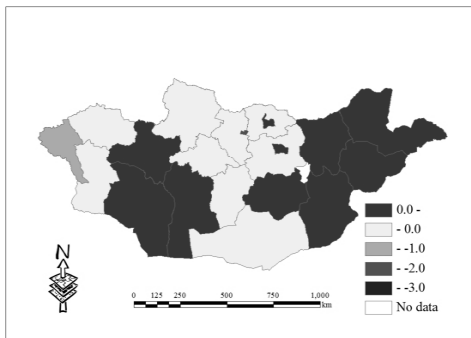
- 1) 家畜をすべて失って（処分して）来た貧困の移動の遊牧民
- 2) 学生
- 3) 地方で、すでに遊牧をしていなかった定住者

純移動率 1980年 社会主義時代
 人口の純移動数（残差法）純移動率 = $(Pt - Po) - (B - D) \div Pt \times 100$



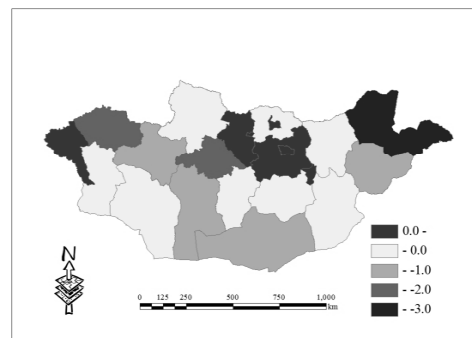
モンゴル統計年鑑 各年版より作成 地図化 by 西前出

純移動率 1990年 社会主義崩壊直後

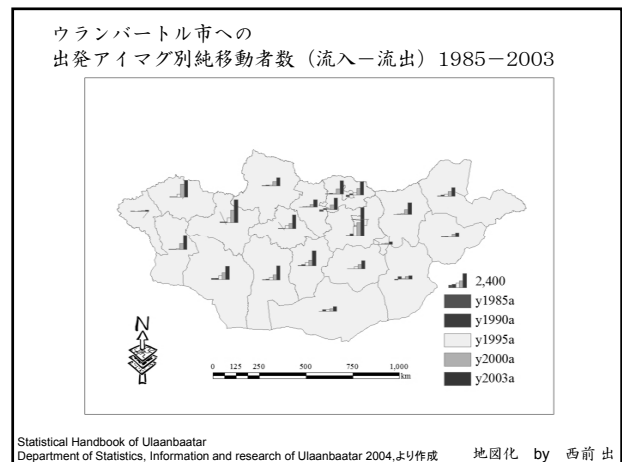
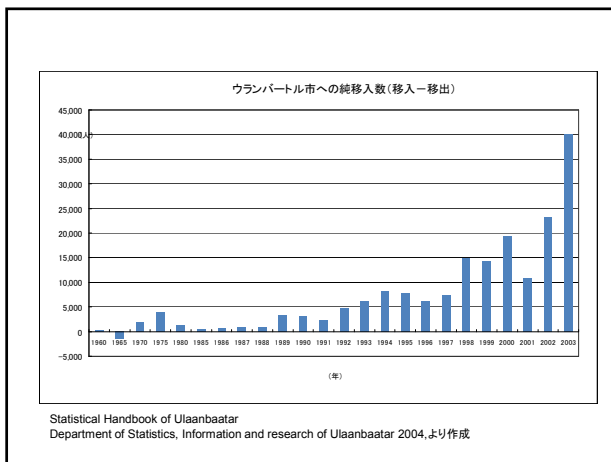
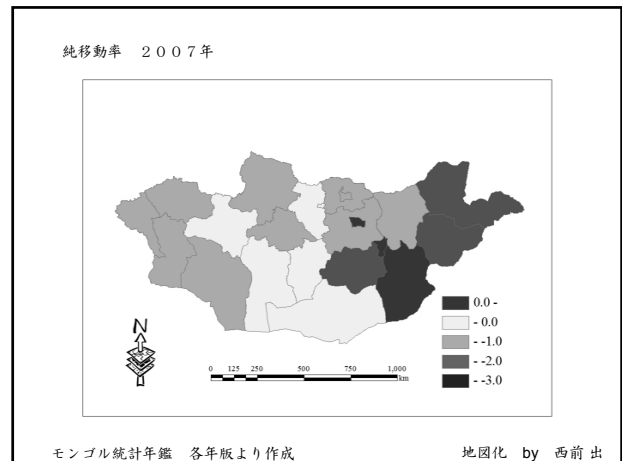
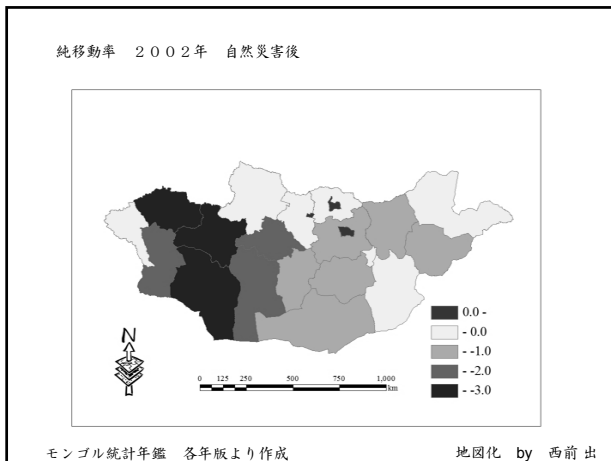


モンゴル統計年鑑 各年版より作成 地図化 by 西前出

純移動率 1997年



モンゴル統計年鑑 各年版より作成 地図化 by 西前出



3. 移動の理由について

移動の理由に関しては配布資料の第4章 (p.13～) を参照
 詳しい理由が述べられている。
 なぜ移動したかという理由については、地球上の普遍的に見られる移動の理由とそれほど大きな違いはないといえるだろう。
 また、ステップマイグレーションが見られるなど、パターンとしても、一般的な現象が見られる。
 よりより生活、教育、就業機会、公共サービスなどが求められることに不思議はない

政策的にはウランバートルへの一極集中を問題視する姿勢もあると見られる
 (「地方の貧困が都市へと移動するという影響」
 資料：p.12)

1992年の新憲法によって、移動の自由が保障されたことによっては、移動自体が自由の権利の行使、と国民に意識されている面がある。
 「民主化による成果」の具体的な形が移動の自由であることにより、今後、国家権力で強制的に移動を制限したりすることはほぼ起こらないと考えられる。